

## 空間線量率の測定結果についての坂巻幸雄氏のコメント

2011年7月13日

●県下には、相模湾沿岸域と秦野～松田地区を除いて福島原発事故の降下物の影響が出ているが、事故前の自然放射能レベル  $0.029 \mu\text{Sv/h}$  がほぼ倍増したくらいで、程度としてはごく微弱である。年間被曝線量が  $1\text{mSv}$  を超える地点はほとんどない。

今後、福島原発で再び非常事態が発生しない限り、危険は大きくはない。放射性物質(主にセシウム 134、セシウム 137) は地表に沈着しているので、対策としては、農作業や泥遊び後の、手洗いとうがいの励行、砂ほこりが立つときのマスクの着用等、専ら若年層を対象にした内部被曝防止策が重点となる。海水浴場の汚染は、無視できる程度に小さい。

●放射性物質の地域分布のムラで特徴的なのは、相模川に沿って、愛川から厚木に伸びる汚染域である。これは、東京都中西部で、あきる野から南下して八王子に達している高線量領域の南方延長に当たる。府中市では、空間線量率が  $0.085 \mu\text{Sv/h}$  に過ぎなかったのに、学校農園で収穫した荒茶からは規制値以上 ( $1,560\text{Bq/kg}$ ) のセシウムが検出された。ことによると、足柄茶の汚染源も、この高線量ゾーンに由来するものかも知れない。

局所的なムラとしては、雨樋の落ち口や、公園の滑り台の下端部等、雨水が集中するところにいわゆるホット・スポットができやすく、今回の調査でもその傾向は現れていた。小区域の精密測定の実施は、行政当局も加えての今後の課題である。

坂巻幸雄氏 日本環境学会幹事・土壌汚染問題 WG 長、日本科学者会議災害問題研究委員会委員。